五重相伝を開筵するために ―総括と提言―

会長　堺組　正明寺　森　俊英

既報の通り、昨年10月から本年2月に全5回の研修会を通じて、五重相伝の開筵を推進するための学びを重ねてまいりました。各講師が蓄積されてきた多くの経験から得たものは大きく、研修参加者においては五重相伝開筵の具体的な模索を始めた方もおられたと推察しています。

最初に、第1～第4回で教授いただいた学びについて、要点のみではありますが報告をいたします。

続けて、私が担当しました第5回【総括と提言】の要点も報告させていただきます。

第1回［講師］日下部　謙旨上人（兵庫教区　慶光寺住職）

受者が9名で開筵された寺院（奈良教区内）の事例をお話しいただきました。受者の確保や財政面での不安を吐露される同寺住職の話を聴くにあたり、その解決策を一緒にお考えになったとのこと。そして不安はあっても、開筵したいという住職の意思を感じられた時点で実行を勧め、受者が少人数であってもできるように全面的な協力をなさったということでありました。

また、その事例に関連して、経費の削減にも触れられて、受者が少人数であれば全体会計は当然厳しいわけです。手伝う側の僧侶がそれを理解して協力を惜しまない体制を、まわりから作っていくならば、開筵は十分に可能であると語ってくださいました。

第1回　10月24日 会場は教務所

第2回［講師］安永　宏史上人

（福岡教区　生往寺住職）

最初に『信法要決講説』を引きながら、《五重相伝開筵がいかに重要であるか》の確認があり、開筵にむけての準備の大切さを細かに説明くださいました。

そして、伝灯師の挨拶話材例の提供がありました。伝灯師（住職）は五重中の毎日、要所において短い挨拶をしなければなりません。その住職側の不安に寄り添うかのような貴重なものでありました。さらに、檀信徒に入行を薦めるにあたり「自身の修養とともに、父母をはじめ先亡親族へ連日に回向を捧げる尊さ」を住職は丁寧に語るべきであるとの具体的示唆をいただきました。

この薦め方はとても参考になるものです。五重相伝開筵にむけて受者の確保は、寺院側にとって課題の一つです。開筵までの期間に、定例法要や日常法務において住職は入行を薦めることになりますが、やはり親族への供養の心から入行を決意される檀信徒もあります。また、たとえ多くの受者が集まらなかったとしても、そのように入行を懸命に薦める住職の努力と熱意が、念仏教化者としての姿になるものだと思います。

第3回［講師］森田　康友上人

（奈良教区　興善寺住職）

五重会礼懺儀をはじめ、疏、表白の語意と全文意訳を教授くださいました。これは伝灯師にとって、とても有難い資料となります。仏前で拝読すべき各文書を、しっかり理解して読み込んでおくことにより、五重相伝において受者に何を伝えるべきかを整理できます。また、その理解が五重中の伝灯師からの短い挨拶に法味が加わることへつながると思われます。

それから森田上人の経験として、檀信徒宅にて五重相伝の教えを授与された実例のお話がありました。ご病気が重篤となった女性に対して、お家に通って教えを授けられました。その経緯は次のようなことであったと。

ご夫婦そろってお寺での五重相伝に入行する予定でしたが、奥様の病状が悪化し余命が深刻になったことにより、ご主人から住職への懇願を受けて、奥様への自宅における授与を実施するに至ったとのことでした。

この事例により、五重相伝入行の対象者は寺院に5日間通える健康な人だけではないことを、あらためて考えさせられる学びでありました。

第4回［講師］坂下　二順上人

（大阪教区　寶泉寺住職）

回向師の立場から、受者が少人数の五重相伝における経験をお話くださいました。受者が少ない場合の利点として、まず塔婆回向では時間的余裕があること。そして、回向が捧げられる精霊と施主

（受者）との関係把握も難しくはないことなど。

たとえば、申込みのあった塔婆回向について、事前に住職からお話を聴き、回向文語句の選択・作成に役立てることもあったそうです。さらには実際に五重相伝の進行中も、少人数ゆえに受者とは顔が見える（親しくなる）関係が築かれるので、「受者の想い」に寄り添う回向が捧げられたことを挙げてくださいました。

それから五重相伝は準備すべきもの、作業があまりにも多いので、人に任せられることは早めに任せてしまい、住職は伝書の作成と作法の練習などに十分な時間を残しておくべきであると強調されました。

そして、パソコン操作ができる人に手伝ってもらうならば、基本情報シートを起点として、名札・調読帳などが自動作成できるエクセルの活用も便利であると提案されて、講師の坂下上人ご自身のために工夫されたファイルを提供くださいました。装備されているシート以外にも、名前シールの作成や、弁当・お菓子の発注数の集計への応用も可能となります。

使用方法の説明書も併せて、当会で保管しております。入手を希望される方は当会の白川幹事長（電話０６－６９０１－０３３６）までお問い合わせください。

＜エクセルファイル／シート内容＞

①基本情報シート

調読番号	氏名	よみがな	参加	性別	年齢	常回向	贈五重	初日	2日	3日	4日	5日	剃度	要偈密室	冥加料
	合計		36	17	19	41	8	35	33	35	35	36	35	36	36
				男性	女性	回向申し込み					参加予定				
	相沢　一郎	あいざわ　いちろう	○	男	58	2		○	○	○	○	○	○	○	○
	石田　二郎	いしだ　じろう	○	男	74	1		○	○	○	○	○	○	○	○
	石川　三郎	いしかわ　さぶろう	○	男	70	1		○	○	○	○	○	○	○	○
	上田　太郎	うえだ　たろう	○	男	68	1		○	○	○	○	○	○	○	○
	加藤　四郎	かとう　しろう	○	男	59	1	2	○	○	○	○	○	○	○	○
	上田　睦子	うえだ　むつこ	○	女	57	1		○	○	○	○	○	○	○	○
	臼井　僚子	うすい　りょうこ	○	女	68	1		○	○	○	○	○	○	○	○
	江田　義弘	えだ　よしひろ	○	男	55	1		○	○	○	○	○	○	○	○
	岡藤　友子	おかとう　ともこ	○	女	73	1	1	○	○	○	○	○	○	○	○
	神山　登	かみやま　のぼる	○	男	72	2	2	○	○	○	○	○	○	○	○
	神山　美幸	かみやま　みゆき	○	女	70	1		○	○	○	○	○	○	○	○

②男性名簿シート　③女性名簿シート

調読番号	氏名	よみがな	性別	年齢
001	相沢　一郎	あいざわ　いちろう	男	58
002	石田　二郎	いしだ　じろう	男	74
003	石川　三郎	いしかわ　さぶろう	男	70
004	上田　太郎	うえだ　たろう	男	68
005	加藤　四郎	かとう　しろう	男	59
006	江田　義弘	えだ　よしひろ	男	55
007				
008				
009				
010				
011				
012				

調読番号	氏名	よみがな	性別	年齢
101	上田　睦子	うえだ　むつこ	女	57
102	臼井　僚子	うすい　りょうこ	女	68
103	岡藤　友子	おかとう　ともこ	女	73
104	神山　美幸	かみやま　みゆき	女	70
105	神田　トシ	かんだ　トシ	女	68
106	木山　敏子	きやま　としこ	女	63
107	黒田　孝子	くろだ　こうこ	女	68
108	近藤　ミドリ	こんどう　ミドリ	女	82
109	坂田　洋子	さかた　ようこ	女	69
110	志方　裕子	しかた　ゆうこ	女	78
111	橋本　信子	はしもと　しんこ	女	66
112	東野　セン	とうの　セン	女	81

④⑥～⑪各種調読帳シート
予算管理シート

⑤名札シート

001　相沢　一郎	101　上田　睦子
002　石田　二郎	102　臼井　僚子
003　石川　三郎	103　岡藤　友子
004　上田　太郎	104　神山　美幸
005　加藤　四郎	105　神田　トシ

以上、第1回から第4回までの要点を略記いたしました。総じて言えることとして、まず受者人数の多い少ないに捉われないこと、さらには受者が少人数の五重相伝には良さもあるということでした。こうした学びを受けて、最終の第5回として私からは総括とともに、次のことを提言としてお話させていただきました。

第5回【まとめと提言】　森　俊英

五重相伝の開筵を躊躇する理由で、よく言われることとして次の3点があります。

1、財政面の問題

2、受者の確保への不安

3、伝灯師を勤めることへの不安

まず、1についてですが受者が少人数であるほど、この問題が深刻なことは言うまでもありません。しかし、第1回の日下部上人の講義にありましたように、手伝う側の僧侶の理解と協力次第で収支を合わせることは不可能ではありません。

加えて申し上げるならば、五重相伝は毎年のように実施するものではありませんので、たとえ赤字になるとしても、住職が決意をして懸命に開筵を迎えた五重相伝は、その出費以上の成果を檀信徒と住職本人に、必ず与えることになるはずです。

そして、2についてですが、受者が大人数の五重相伝は確かに盛大であり素晴らしい開筵です。しかし受者が3名あるいは2名であったとしても、それも1回の五重相伝であり、新しく念仏者が生まれる立派な開筵であります。

この点についても加えて申し上げたいこととして、他寺院の寺族の協力を得るという方法も助けとなります。ある寺院が開筵を決意したが受者の確保に苦労をしている場合、近隣や縁のある寺院の寺族が入行をして、受者の確保に協力してあげることです。

こうしたことは以前から各地で行われてきましたが、組や教区がその橋渡し役となって開筵の情報共有が促進されるようになれば、受者の確保への不安も軽減されることでしょう。

ところで、今回の一連の研修を通じて、私が複数名のご住職からお聴きしたこととして最も深刻であったのは、3でありました。

伝灯師を勤めることへの不安について

さて、私が聴いたかぎりの推測ではありますが、五重相伝の開筵を躊躇する最も深刻な問題として考えられる「伝灯師を勤めることへの不安」について、そしてその解決への道を述べてまいりたく思います。

まず、伝灯師を勤めるには「五重の相伝書」をしっかり読み、理解しておかねばなりません。

初重　『往生記』
二重　『末代念仏授手印』
三重　『領解末代念仏授手印抄』
四重　『決答授手印疑問抄』二巻

さらには、

『往生記投機抄』ー往生記の注釈書
『授手印伝心抄』ー末代念仏授手印の注釈書
『領解授手印徹心抄』ー領解末代念仏授手印抄を徹底して解説する書
『決答疑問銘心抄』二巻 ー決答授手印疑問抄の注釈書

すなわち、この三巻七書をもって七祖聖冏上人が五重相伝の規式を制定してくださったわけですから理解しておかねばならないわけです（三巻七書は『浄土宗聖典 第五巻』に原文と書き下し文が所収されています）。

ただし、書き下し文であっても、十分な理解を得るには何度も拝読しなければならない書物であります。そこで、その理解への助けになるものが身近にありますので確認しておきます。平成13年～17年に浄土宗から発行された『布教羅針盤』の5冊です。同書を拠り所として三巻七書の理解に取り組むのがお勧めです。

『布教羅針盤』は、浄土宗ネットワーク（要パスワード、『宗報』を参照）でパソコン等において閲覧可

第五重について

ところで、当ページの上段で略記しましたように初重～四重までは相伝書がありますが、第五重については異なった立場にあることは申すまでもありません。

五重相伝の総仕上げとして、密室道場で曇鸞大師撰『往生論註』の説示に基づいて、伝灯師は「凝思十念の伝」を口授心伝（口伝）によって受者に伝えます。『往生論註』は第五重の伝書には制定されていませんが、「凝思十念の伝」の拠り所となる説示が同書にあり、とても大切なものです。

つきましてはその該当部分（『往生論註』巻上「回向門」に説かれる八つの問答中の八番目の問答）の確認をしておきたく思います。紙面の都合上、現代語訳のみを掲載します（注1）。

問う。私たちの心が、もしも他の縁によって惑わされてしまったら、すぐにその惑いを収めて、称えた念仏の多少を知ることができよう。しかし、称えた念仏の多い少ないといった数を知らねばならないというのであれば、その状態は無間ではなく、相続とはいえない。したがって、もしも心を凝らして想いを注ぐというのであれば、どうして念仏の数を知ることができようか。

答える。『観無量寿経』下品下生に「（具足）十念（称南無阿弥陀仏）」と説かれているのは、臨終の凡夫が浄土往生のつとめを完成することを明かしているのであって、必ずしも念仏の数をわれわれ凡夫が知る必要はないのである。

例えば、蝉は春秋を知らない。短い夏を一生とするから、この虫は夏ということを知らないのである。ただ人間がその事を知って「蝉は夏に鳴く」と言っているに過ぎない。「十念」によって浄土往生のつとめを完成する（業事成弁）というのも、神通力を具えられた仏が言われることである。われわれ凡夫は、ただひたすらに念仏相続するのみであって、他のことを思いめぐらす必要はない。また、どれほどの暇があって、念仏の数を数える必要があろうか。

とはいえ、もしも知らねばならないというのであれば、その手だてはある。それとて、口伝えによって授けるということであって、紙に書き記すことはできない。

さてこの問答を拝読後、まず感じることとして現代語訳であっても全体の理解は容易ではありません。しかし、注意深く熟読しておりますと、説示の内容をうかがい知ることができます。

詳しく申しますと、最初の「問う」にありますように、念仏の数を知ろう（数えよう）とすれば、それは心の中で別の動き（数えるという思考）が生じるため、行者が阿弥陀仏に心を凝らし（しっかり寄せて）続けることにおいて、つまり「余念」を交えてしまうわけです。

その問いに対する「答え」として、あくまでも念仏の数は往生への絶対的な条件ではなく、臨終の凡夫が、わずか一回の念仏を称えたあとに絶命したとしても往生は叶うということ。そして、命が続くのであれば念仏を称え続けるべきことが説かれています。

ただ、そのあとに付け加えるごとく、次のような趣旨が説かれています。

「とは言いましても、経典には『乃至十念』とあるのですから、もしも念仏の数を知りたいのであれば、方法はあります」と前置きしたうえで、

「数を数えるという心の動き、すなわち『余念』を交えなくても、十回（注2）という念仏の数を誤らずに称える方法があり

ます。それは口伝によってのみ師匠から弟子に授けられます」と。

口授心伝の尊さ

「凝思十念の伝」の拠り所となる『往生論註』の該当部分を確認してまいりました。口伝の前提となる説示に、臨終の凡夫に焦点をあてて、念仏がもつ無上の功徳のことが明確に説かれています。さらには、余念を交えることなく阿弥陀仏にしっかり心を寄せながら念仏を称え続ける「手だて」こそが、私たちが授かってきた口伝であることに気づかされます。

その口伝は古来から脈々と伝わってまいりました。そして、住職（伝灯師）から檀信徒へは、五重相伝の最後に口伝の伝承が許されています。

住職が開筵を決意して懸命に檀信徒に入行を薦めても、受者が思うように集まらないこともあるかもしれません。しかし、口伝を伝承する機会と、その可能性が生み出されたことになります。そして、たとえ受者がお一人であったとしても、その伝承は行われたこととなります。

こうした五重相伝の全体構造から見て、伝灯師は密室道場において「凝思十念の伝」を口伝によって受者に伝えることができるとともに、法然上人の「行は一念十念なお虚しからずと信じて、無間に修すべし。一念なお生まる、況や多念をや」（「一紙小消息」）という念仏の教えの真髄を、さらには平生に念仏を称える大切さを、十分に伝えきることができるのです。

以上、五重相伝の開筵を躊躇する理由の一つとして、「伝灯師を勤めることへの不安」について言及してまいりました。確かに伝灯師として学ぶべきことの難しさや、儀式・作法への準備の多さは、住職を不安にさせるものです。

しかし、余念を交えず、念仏を称え続けるための口授心伝の尊さに私たちが胸を熱くして、「平生からの念仏の相続」こそが五重相伝の中心目的であることを肝に銘じたならば、「不安」により躊躇するのではなく、「開筵への意欲」へと道が開かれるのだと思います。

開宗八五〇年を記念して、1ヵ寺でも多くのご寺院が、新たに五重相伝開筵を決意され、受者が少人数であってもお互いに助け合って、念仏弘通が進められることを願ってやみません。

南無阿弥陀仏

（注1）『布教羅針盤』（第五重）平成17年発行29・30ページから転写

（注2）「十念」の「十」という数字は満数を意味する（『浄業信法訣』に「十は小の満数。百萬は大の満数なれば、多きは百萬遍。少なきは十念と云うなるべし」とあり）。